

# 幼稚園における問題児指導の工夫

河尻 朋子

幼児は幼稚園生活のなかで、多くの友だちと接することによって集団のなかの自分はどうかあらねばならないかを子どもなりに学びとり、また歌をうたうこと・絵をかくことなどいろいろな経験を通して個性をのびし、社会人として好ましい人格の基礎をきずいていくわけであるが、それは常に幼児の生き生きとした活動をさまたげることなく進められていかなければならない。すべての経験内容はこのことを考慮に入れて用意され、指導計画もまたこの線に沿って作られ展開されていくべきである。しかし、それでも幼児の活動と指導計画との間には、ずれの生じてくることもある。そのような場合指導計画をかえることをためらってはならないが、なぜそれが生じたのか、どのようにすればその調整をすればよいかをまず考えてみなければならぬ。

## 1 目的

保育が計画どおりに進められない場合、その原因はいろいろ考えられるであろうが、ここでは実際がぶつかった大きな問題として、私の受け持つ二年保育年長組のなかから、集団のひとりとして好ましくない態度・行動を持つ幼児をとりあげ、その幼児を集団にとけこませて保育を進めていくにはどうすればよいかを、実際保育をとおして考えてみたいと思う。

この研究は昭和三十四年四月から十二月末まで年長組になってからの八か月間、被験者として選んだ三名の幼児を観察してきたものであるが、重点をおいたのは三十四年十一月と十二月の二か月であることを申し添えておく。

## 2 被験者について

被験者は次の三名である。

- |      |      |        |      |
|------|------|--------|------|
| 男児 A | (六歳) | IQ 一〇三 | 積極的) |
| B    | (六歳) | IQ 一二一 | 積極的) |
| 女児 C | (六歳) | IQ 一二一 | 消極的) |

ここに選んだ被験者は、もちろん最初の一年においても保育上とりあげてよい存在であったが、保育を進めていく上に大きな妨げとなるほどの影響はなかった。ところが二年目に入ると、成長にともなう組の子ども全体の行動が活潑になり、たまたま被験者A Bのような子どもがリーダーになったりすると、好ましくないグループができて他の子どもたちに迷惑をかけるというようなことも起こってきたし、またCのようにごく消極的な子どもはますます遅れが目立つようになったので、とくに被験者として選んだわけである。

なおこの子どもたちの入っている組は、四〇名のうち一年保育児が八名、男女の比率は男児二五名女児一五名で男児が一〇名も多く、雰囲気としても男児中心の活動的な組といえることができる。

(1)被験者の概要(a) (幼稚園での観察、幼児家庭生活調査表をとおして)

A (男児)

家族は本人のほか父、母、祖母、伯母、姉、妹の七人で父親の職業は会社員である。乳児期に肺門淋巴腺炎にかかり体が弱く、両親も健康第一に育ててきたのでしつけの面では甘やかしがちであったといっている。入園当初は母親から離れなかったが幼稚園生活になってくると、理由もなく友だちをぶつたりするなど攻撃的な行動がめだち、他の子どもから避けられていた。二年目に入ると攻撃的な行動もだんだん少なくなり親しい友だちも何人かできてきた。

B (男)

家族は本人のほか父母の三人であるが、家が商業なので使用人が二、三人いる。幼稚園生活になかなかならず、お弁当がはじまっても一か月ほどは皆といっしょに食べられなかった。Aと同様に攻撃的な行動が多く他の子どもから避けられていたが、ひじょうにほがらかで、悪かったと気がつけばすぐすなおにあやまるところは他の子どもに愛されることもあったようである。

C (女児)

家族は本人のほか父、母、祖父、祖母、妹の六人で父親の職業は公吏である。幼稚園では絵をかいたり製作をしたりすることが大好きで室内にとじこもりがちなので、他の子どもと外で元気にあそぶよう指導してきたが、遊びに意欲を示さず、友だちが誘いにくてもほとんど場合拒んでいた。二年目に入ると自分から遊びに入ってくるようにはなったがまだ友だちを求めようとはしない。

(2)被験者の概要(b) (児童行動評定尺度をとおして)

幼児家庭生活調査表、幼稚園での観察から得たあらましのほかに、親のみた被験者、また担任外の先生がみた被験者の姿を知りたいと思ひ、親と先生にアンケートをお願いした。これは被験者の親だけではなく、組の全部の親に記入してもらったもので内容は

20項より成り、下に例が示してある。

(3)方法

(1)被験者について  
現在までの保育の効果がどのようにならわれているかを次のような保育の領域のいくつかの点にしぼって五段階の評価により明らかにする。

①個人的な生活習慣について

必要最少限の基本的なものと考えて、次の五項目を選んだ。

あいさつ うがい 手洗い  
―― 遊具のあとかたづけ あとしまつ

手洗いについては、お弁当の前、仕事のあと砂あそびをしたあとなどはよくできるが、お手洗いにいったあとの手洗いが徹底していないのでその点での評価をすることにした。あとしまつについては、お弁当のあと・仕事のあとの始末ということにした。

②集団的な生活習慣について  
教師も含めた集団のひとりとしての態度がどの程度身について

	○印……お子さんのありのままの状態	◎印……こうなつてほしいという理想の状態
1	いつでもおしゃべりをする。おしゃべりをする。おしゃべりをする。おしゃべりをする。	おしゃべりをする。おしゃべりをする。おしゃべりをする。おしゃべりをする。
2	他の子に強い。他の子に強い。他の子に強い。他の子に強い。	他の子に強い。他の子に強い。他の子に強い。他の子に強い。
3	他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。	他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。他の子への影響が大きい。
4	言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。	言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。言語動作がよくなる。
5	他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。	他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。他の子に対してやさしい。
6	はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。	はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。はみがかち、大人に頼る。
7	大人に頼る。大人に頼る。大人に頼る。大人に頼る。	大人に頼る。大人に頼る。大人に頼る。大人に頼る。

いるかを総合的に知るのにもっとも役立つものと考え、次の三項目を選んだ。

友だちに対する態度、行動。  
担任の教師に対する態度、行動。  
集団における統率性。

③保育内容に対する興味の程度について  
興味の程度がはっきり出やすいものと考え、次の二項目を選んだ。

音楽リズム（歌 楽器あそび 自由表現）  
絵画製作（絵 貼り紙 製作）

評価の段階はA B C D Eの五段階である。（内容は省略）これについては研究者自身が実際保育にたずさわっている者として評価をおこなうのに容易であり、また得られた結果ができるだけ正確であるようにということを考慮に入れた。

(2)年長になつての第一期の間に保育が被験者のために指導計画どおり進められなかった場合、どのように転換させたか、それが成功したかなど保育日誌を主にして記述を試みる。

(3)第二期の間被験者が集団の好ましい成員としていろいろな活動に参加できるような雰囲気を作り指導計画をかえ、その実践をとおして保育効果のあらわれの有無とその過程を追ってみる。

4 研究の経過

(1)保育効果の評価について

評価は組の全部の子どもについておこない、そのなかで被験者がどのような位置をしめているかを表したのが第一表である。  
評価は同じ子どもについて二回おこない、その一致度が十四項目のうち十一項目まで70%から95%という値なので一応信頼できるものと考えた。

第一表

(数字 %)

項目 評価	個人的な生活習慣					集団的な生活習慣			音楽リズム			絵画製作			
	あいつ	うがい	手洗い	あたか	あし	ほと	か	教師に	統率性	歌	自	由	器	絵	貼り紙
評価段階	A	57.5	17.5	37.5	17.5	20.0	20.0	45.0	17.5	30.0	15.0	20.0	72.5	37.5	42.5
	B	22.5	30.0	17.5	37.5	35.0	30.0	27.5	40.0	17.5	17.5	17.5	10.0	25.0	37.5
	C	10.0	35.0	35.0	37.5	25.0	25.0	27.5	40.0	45.0	37.0	55.0	7.5	10.0	17.5
	D以下	10.0	17.5	10.0	7.5	25.0	25.0	0	2.5	7.5	30.0	7.5	10.0	27.5	2.5
被験者	A	D	E	E	D	D	D	B	B	D	D	E	A	D	A
	B	D	E	E	D	D	E	B	B	B	B	E	E	E	D
	C	B	C	B	B	B	C	B	D	C	C	C	A	A	A

Cは友好性・統率性に欠けるところがあるほかは別問題もないようであるが、A Bの二人は全般にわたって評価の段階がひくく、ことにあいつ、うがいなどの生活習慣、友だちに対する態度・行動などの面で問題とすべきことが多い。

②第一期の間被験者の状態と保育について

①どのような点で保育が妨げられたか。

○音楽リズムにおいて  
遊戯などふざけて他の子どもにめいわくをかけることが多い。そのため二人一組ですることでは相手をつとめる子どもがいまいちというところもあつた。また端から順に二人ずつスキップをするというようなどき、自分の番がこないうちにとび出して邪魔をし、や

めるようにいってもなかなか聞こうとしない、など。  
○言語において

人の話を静かに聞くことができない。人の前ではっきり話せない。てれかくしか突拍子もないことをしたり言ったりしてわざと皆を笑わせたりする、など。

したがって以上経験内容の総合とも言うべき劇あそびのようなものになると、著しく保育が妨げられることになる。一期の末、こども会にする劇あそびの練習を何日かしたとき、そのグループ指導が順調にゆかず思わぬ時間をとったりなどして他の子どもにたいくつな思いをさせ、組全体おちつかないことも多く保育を進めていくのに骨が折れた。

○あそびにおいて

A Bとも攻撃的な行動は最初の一年にくらべずと少なくなっ  
てはいるが、協力的な態度は余りみられず、砂場でほかの子ども  
たちが作っているものをこわしたり、遊具を独占したりすること  
はたびたびであった。Cはひとり得意いようとする態度が残ってい  
てあそびのなかへひき入れるのに骨が折れた。

②保育がうまく進められない場合どのような転換を試み、またその結果はどうであったか。

○音楽リズムにおいて

男児の多い活潑な組でありまた被験者A Bのことも考えて、自由表現などの場合、運動量の多いものを題材にとりあげてみたが結果としてたいした効果は認められない。たとえば汽車ごっこを自由表現で楽しくしようと思っても始めの間だけで、A Bなどすぐふざけてリズムが乱れると全体がおちつかなくなってしまう。逆に運動量は少ないが子どもたちの喜びそうなゲームといったも

のをとり入れてみたが、音楽リズムをふざげないで楽しくするという目的に対してはこのほうが効果的であったように思う。

○言語において

見ることは好きであるがただ聞くということは嫌い、話すのはなお困るという子どもたちなので、見ることを主にだんだん聞くこと・話すことももっていくようにした。紙芝居、絵本、テレビなどで初めは静かに話を聞くという態度が身につくことを目標にし、話し合いのときにも絵本や紙芝居などを使い、見るという要素を欠かさないようにしてみた。このような話し合いにはAもBもたいへん興味をもって加わり、楽しい雰囲気うちに保育がすすめられていったが、皆の前で発表するということまではいかなかった。Cは一期の終りごろには一応前へ出てこようとするようになった。

○あそびにおいて

A B Cそれぞれについて、いっしょにあそばせたいと思う子ども  
ものグループを作りいっしょにいられるよう席をきめ、なお  
グループの動きや被験者の状態には絶えず気をつけてメンバーの  
入れかえもするようにした。Bは一期の末になって三人の友だち  
ができ砂場あそびなどでひじょうに親しくなった。Cは相変らず  
ひとりであることも多かったが、私とそのグループに入って、い  
っしょに花いちもんめなどしてCを誘うと、ときどき入ってくる  
ようになった。しかし私がいないとやはり誘われてもグループの  
なかへ入ってこようとしなかった。一方Aは近所からきている男  
児とすぐいっしょになり、二人で攻撃的な行動をとることもたび  
たびあったので、できるだけ別々になるように仕向けたり、ある  
いは二人いっしょにあそびに誘ったりしたが、ときどき意識して

私を避けることもあり、なかなかうまくいかなかった。

以上、被験者のために保育の妨げられやすい三つの場面をとりあげ、それについて実際試みたことをいくつか保育日誌を追って述べたわけであるが、Bについては他の面での変化がみられた。

というのは、第一表でもわかるようにBは絵画製作が大嫌いであったが仲よしの三人が絵をかいたり製作をするときには仕方なしにはあったがともかくいっしょに絵をかいたり製作をしたりするようになったことである。Bがこうしてたとえ一時的であったにしてもひとつの集団にとけこむことができたということはBにとって画期的な進歩といえるであろう。AとCはそこまでいかなかったが、Bと同じように、小さくとも安定した好ましいグループ活動に入っていくことができれば、勝手なふるまいやひっこみ思案な態度もおそらくなくなっていくことと思われる。A B C三人が小さな集団にとけこみ、さらに組全体あるいは幼稚園全体という大きな集団にまでとけこんでいくようになること、これが第二期への課題であった。

(3)第二期の間指導計画の変更、実践と被験者の状態について

九月から十月末までは老人の日、運動会、遠足など大きな行事が相つぎ落ちつかないので、研究期間としては不適當と考え、結局十一月に入ってから十二月なかば第二期がおわるまでの約一月を選んだ。

①指導計画の立案とその理由。

十二月の指導計画はクリスマススを兼ねた期末のことも会を主な目標とし、劇あそびをすることになっていたが、一期のことも会のと看、二期に入ってからそれまでの被験者の状態を考え、また前に述べた一期から二期への課題——より大きな集団への参加

——ということも考えあわせて、グループ活動をさせるのにもっとも効果的と思われる共同製作をとりあげてみた。それも、ことも会のときにお母様たちにもみていただくために紙芝居を作ることにした。

②グループの構成。

どのような筋のものにするかを話し合ひできめ、それをいくつかの部分にわけて、どの部分を受けもって絵にするか好きなところの手をあげさせてみたところ、ちょうど四、五人ずつのグループが八つできあがった。

○Aのグループについて

男児三名女児一名で皆おとなしい。男児一名を除いては絵画製作のひじょうに好きな子どもばかりである。統率性のすぐれた子どもはいない。

○Bのグループについて

男児四名、IQ一二五から一四五といずれもIQの高い子どもばかりで、ひとり統率性のすぐれた子どもがいて、よくグループをまとめていく。Bはこのなかの三人とひじょうに仲がよい。

○Cのグループについて

女児四名で二名は活潑な子ども、あと二人はおとなしい。みな絵画製作が大好きである。統率性のすぐれた子どもはいない。

③被験者A B Cがそれぞれのグループのなかでどのように動いていたか。

○絵画製作活動が主になった期間

グループごとに一枚の模造紙にどのような絵をかきか、誰がどの部分を受けもつかなど話し合ひできめてから絵をかき始めた。このような話し合ひのとき、リーダーとなる子どもはいないグル

ープには私も加わった。

Aについて

Aはよく発言するが、自分本位に事を運ぼうとするので、仕事のわりぶりなど私が助言を与えて不公平にならないようにした。絵をかく仕事に入ると、自らグループの子どもたちを呼んできて積極的に仕事を始めたこともあり、いつも張りきってこの活動に参加していた。

Bについて

Bは絵画製作が嫌いでこの共同製作活動に対してもいつも協力的というわけではなかったが、活動に加わるにはよくリーダーのいうことをきき自分の分担はきちんとしていた。

Cについて

Cは意志表示が弱いので、仕事の分担についての話し合いその他いろいろな活動においてとり残されがちであったが、よく責任をもっていたも協力的であった。

○言語活動が主になった期間

これは各グループの絵がもうほとんど出来あがったところから始め、一週間たらずの短かい期間であった。グループごとに出来あがった絵をみながら子どもたちが自由に話すのをテープに吹きこみ、会話形式になっているところはそのまま活かして私が筋をつなげてみた。AとBは話すのを嫌がり一度もテープに入れなかったが、Cは別にはずかしがる様子もなくひとりで五分ちかくも話し続けた。いままで人の前で話すなどということはおよそ出来なかつたCであつただけにびつくりさせられた。テープレコーダーのマイクを手に話すということは、大勢のなかにいってもそれほど緊張を感じないのかもしれない。

話ができあがると今度は話すことの方担をきめ、マイクを使つてきれいに話す練習を何回か重ね、こども会を迎えたわけであるが、ABC三人とも百人以上のおとなを前にしてその子どもなり

に落ちついて話すことができた。

④被験者ABCに共同製作活動以外の面でなにか変化がみられたであろうか。

ABC三人がそれぞれ自分の属するグループでおよそ一か月にわたり共同製作活動をおこなつたわけであるが、その間に協力することの大切さを感じとってくれること、それが私のもつとも大きな願いであった。願いどおりとはいえないが少しづつ変つてきたと思われるところを述べてみたい。

○Aについて

グループのなかのひとりの男の子とくに仲よくなり自由あそびのときにもいっしょに画用紙でなにか作つたりするようになり、一期に比べて室内あそびが多くなつた。ほかの子どもたちに対して迷惑をかけることは相変わらずであったが、それも理由なしに当りちらすようなことは殆んどなくなつた。歌をうたうことなどよくするようになり音楽リズムの面でもおちつきが出てきたように思われる。

○Bについて

グループの子どもたちにひかれて、はじめは仕方なしにしていた絵画製作にもだんだん興味をもつようになつてきた。自由あそびのときにも一期の末からひき続きこのグループでまともまり、砂あそび・積木あそびなどをよくし、他の子どもたちにひどく迷惑をかけることはなくなつた。音楽リズムの面でも、リズムあそびのときなど、ひとり勝手にふるまつたりするようになることはひじょうに少なくなつた。

○Cについて

グループのなかのひとりが、たびたびCをあそびなどに誘つてくれるようになり、Cもその子どもに対して自分のほうから受け入れてもらうとするようになった。しかしまだ積極的に働きかけるところまではいかなかつた。

以上は幼稚園での観察記録、保育日誌などをおして得た変化のあら

第二表

(数字% 但し被験者の項を除く)

評価	項目	個人的な生活習慣					集団的な生活習慣			音楽リズム			絵画製作		
		あいさつ	うがい	手洗い	あとかたづけ	あとしまつ	ほかの子どもに	教師に	統率性	歌	自由表現	楽器あそび	絵	貼り絵	製作
評価段階	1上	20,0	47,5	30,0	37,5	47,5	25,0	25,0	17,5	27,5	35,0	27,5	15,0	25,0	2,5
	2上	10,0	7,5	12,5	22,5	30,0				5,0	12,5	10,0	2,5	7,5	2,5
	3上		7,5			2,5	2,5				2,5	2,5	5,0	5,0	2,5
	A	50,0	17,5	37,5	15,0	20,0	20,0	42,5	15,0	30,0	15,0	25,0	67,5	40,0	65,0
	B	10,0	12,5	12,5	17,5		30,0	12,5	35,0	2,5	10,0	12,5	7,5	10,0	17,5
	C		7,5	7,5	7,5		10,0	20,0	32,5	27,5	25,0	22,5		7,5	7,5
	D以下	2,5					10,0				2,5			2,5	
	1下	5,0					2,5			5,0				2,5	2,5
被験者	A	D上	1上	1上	2上	3上	1上	1上	B	2上	2上	2上	A	3	A
	B	D	1上	1上	2上	2上	1上	1上	1上	1上	3	3	3	B	2上
	C	1上	1上	1上	B	1	1上	1上	1上	C	C	C	A	A	A

評価段階 上とあるのは段階が1から上がったもの、下は下がったもの、かわらないものはABの記号でそのままを表した。

ましてあるが第一表と同じ評価を二期が終わったときにおこなったものが第二表である。

### 5 結論

被験者ABC三名の以上のような経過の状態からすぐに指導計画の変更と幼児の活動にあらわれたその効果というものをとりあげることは軽率であるが、ともかく一月ほどの共同製作活動という大きな保育の流れのなかで、三人ともその子どもなりに集団の成員として責任を果し、集団という枠からははずれてしまうことなく、むしろある場合には積極的な協力も惜しまなかったことは事実であり、またいろいろな面で協力ということにもっとも欠けていたこの三人が多少とも協力的な態度を身につけてくれたことを、結果として認めたいと思う。また一期・二期とこのような子どもたちの指導とおして、理論としてでなく実践上如実に感じたことを結論として述べてみるならば、次のようなことがあげられる。

- (1) 保育が指導計画どおり進められない場合、教師としては保育の内容、技術の両面からその原因をさぐり、どのような子どもも引きつけることができるような内容、材料の与え方を絶えず考えていかなければならない。
- (2) 保育上困る子どもの「困る」という意味はいろいろあるが、子どもの集団における位置の改善、友人関係の調整ということとは、「困る」多くの場合問題解決のかぎになるのではないだろうか。
- (3) 指導計画というものは一つのバックボーンであってその肉づけはどのようにおこなわれてもよいわけである。要は子どもが幼稚園生活のなかで、個人として好ましい態度行動がとれると同時に集団のひとりとしても好ましい態度行動がとれるということが保育の大きな目的であることを忘れてはならない。(二子幼稚園)